

浄土

1987-6

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別投承認雜誌) 第三二五号
昭和六十二年五月二十五日印刷 昭和六十二年六月一日発行
第五十三卷 六月号





六月の秀句

河口や六月の雲涌上る

篠原 温亭

大寺のうしろ明るき梅雨入かな

前田 普羅

しみじみと見て梅雨寒の田の面かな

牧瀬 蟬之助

|| 六 月 号 ||



極楽国土には、七宝の池あり、八
功德水、その中に充滿せり。

——『阿弥陀経』

目 次

法 話

六月の修養……………村上博了……(2)

体験随想

アメリカで教えられた私の宗教……………二本松 嘉 瑞……(7)

<連載法話>④

ナムアミダブ……………大 室 了 皓……(12)

=江戸物語=(5)

江戸歌舞伎……………細 田 隆 善……(18)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <3>

海と山の狭間で

——突極の花、キブシ——

……………木 下 隆 一 ……(29)

◇◇ 長篇連載小説 ◇◇

立ち止まるな善導 第36回

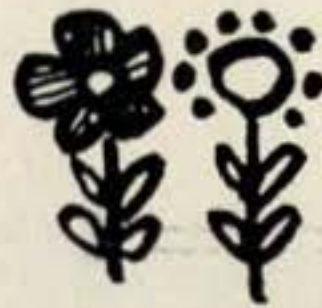
歴 史 の 空 洞

……………寺 内 大 吉……(35)

挿絵 松濤 達文

表紙絵「合 飲 の 花」 松浦春子画

六月の修養



水無月を迎える。田も畑も森も山も緑り一色、見るからに生き生きとして精気一杯、特に若竹が、まっすぐのび、その若葉が、風にそよぐ姿はあいらしい。

若竹は風に委せる身ながらも

たわまぬふしが在りところ知れ

一日は衣(ころも)替えて、軽い夏姿、手足がのびのびとなり、海や川や山へと心が浮き浮きする。

『阿弥陀経』に「池中蓮華、大如車輪、青色青光黄色黄色赤色赤色白色白色」とあるように、青色は万人に愛され、人心をやわらげる。青蓮はよき念仏者には見えるという。青緑は、自然と活気を喚起する。衣替えには、仏性にも気付き育てたい。

十日は時の記念日、我々の毎日は、時の流れの中に在る。たとえば学校・官公所・デパート・列車等、す

むら かみ はく りよう
村 上 博 了

(茨城県境町専修寺住職)

べて定め、の時間による。我々は余りにも時に馴れし
しんで時の価値を忘れ勝となる。

しかし古人は、「時は金なり」と教えて下さって、
時の大切さを忠告される、我々の生命も又時のつみ重
ねの生活である。私は大正九年四月東京芝中学へ入
学、渡辺海旭先生（一八七二—一九三二）が校長であつ
た。校長先生は有名な先覚者、仏教、宗教学者、社会
事業家、英独仏はじめ各国語に通じていた。芝中学校
長として二十余年に亘り、新年拝賀式には一度も欠席
されなかった。渡辺先生の御指導で、十日の時の記念
日には、放課後に、時を大切にしましょう、道徳を守
りましょう等と印刷ビラを通交人に配った。当時とし
ては珍しい。先生は西欧先進国が、子供会、子供大会
を開催し、相互理解交遊することに伍して、我が国に
も少年団、子供会の開催勉学をはかられた。

時を大切にということは、時を活かし浪費しないこ
とである。

さればとて、我々が時にとらわれては、何もできな
いし、気せわしくなり疲れ果てる。時を上手に使うこ
とは、文化生活の常識である。

寺院と時とは、昔から深い関係下にある。寺院七堂
伽藍の一に鐘楼堂があり、寺院諸行事上の鐘であつて
も、毎日庶民生活上の切り目として、明け六つ、暮れ
六つには鐘を鳴らして、一日のけじめを知らせ、明日
への原動力として、現在に至る。又余韻は遠く近くひ
びきわたって、『平家物語』に見られるような諸行無
常又は覺せいの音色となっている。我々の生活に大切
な信仰心仏性開現への手引きとなる。三井物産マニラ
支店長若王子信行氏が、フィリッピンで百三十七日間
誘拐され、陽のあたらない陰気な所、食物差入れて、
その日の時間を悟り、又一日中話相手がいない孤独の
所に幽閉され、不安と強迫の連日に耐え、生還された
お話に、つねに信仰していた観世音菩薩のお姿を想起
しては「なにくそ」と耐えしのばれたということは、
正しい信仰の力であろう。

時間を生かすことは信仰の力に由る。明け六つ、暮
れ六つの鐘の音をきいては、吾はいつも仏と共にあり、
仏ましますからには、何ぞ怖れんと、信念を更に新た
にして、生命を大切にいたしたい。

大本山増上寺八十二世椎尾弁匡大僧正は、

時は今ところ足もとそのことに

打ちこむ力永久(とは)のみ命

と教え下さる。高根(嶺)の花より、現在の第一歩に、全力を集中し、一隅を照らす毎日でありたい。

十一日は、本年の梅雨入りである。そろそろ梅の実が熟して梅干、梅酒の本節となる。一般には天与の雨期を迎え、田植の時期であった。

現在は、農器具と田耕の進歩で、田植が早くなり、六月には、苗がのび盛り、所によっては、ホタルも珍しくない。昭和四十年代頃までは、入梅を待ち、降雨と同時に、それとばかりの田植であった。鳥羽・津山地方には、お田植祭りと称して、にぎやかな田植神事が行われている。天与の水によったので瑞穂の国である。又水無月とは、むだ水がないということである。又水無月とは、むだ水がないということである。

しかし長い雨期だけに気温の変化も少くない、又食中毒も起り易い。我々は各自健康に留意し、先づ健康は幸福生活への第一歩とし、中元以後の炎暑に耐える心身の育成につとめたい。

二十一日は父の日である。父母の許で生活していると、いつも父母の大愛が大陽のようで、その慈恩を気付かず又忘れ易い。『父母恩重経』に、

父母の恩、重きこと、天の極りなきがごとし云々
孝養の一事は、在家出家の別、あることなし云々と教え下さる。父母なくして、我々は生れることがない、身体をいただき、幼少より宝ものとして育成し下される。『父母恩重経』には、

父にあらざれば、毒の命をおとすことを知らず。母に非れば、薬の病を救うことを知らず。父母、外に出でて、薬の病を救うことを知らず。父母、外に出でて、他の座席に往き、美味珍羞を得ることあれば、自ら之れを食うに忍びず、ふところに収めて、持ち帰り、よびて、子に与う云々

と、子供第一に育成され生業を得て大人の仲間入りして社会生活ができる。有難いことではないか。私は昨年傘寿を迎えているが老人の心はよく判る、先づやさしくして貰いたい。次に話相手になってほしい。そうしてご先祖さまを大切に ご供養を忘れないことであ

る。「親の恩齒が抜けてからかみしめる」、墓石に布団をかける、では困るのである。

父の日が設けられることは、経済大国となり、自由が強く打ち出され、なんでも自由平等、ともすれば、父母を忘れがちとなったからではなからうか。父の方から見れば、我が子を忘れる父はいない。又、母もいない。

たとえ一日とても、父に喜んでいただけるよう、又子としても、大恩ある父母を更に意識して、少しでも心配をかけないように、いつもやさしく接してほしい。

父母に孝行することは、親子の間では、永遠の真理であり、心と心のつらなりがある。父の日を迎えては、父に悦んでいただけるよう最善を捧げたい。

十日は、我々仏教徒にとり忘れることが出来ない。

『往生要集』の著者恵心（信）僧都（九四二—一〇一七）のご命日に当る。著書約七十余部百五十巻、お念仏は『摩訶止観』の念仏といわれるが、長保三年（一〇〇二）三月十五日地藏院に端座して、一心に称名念仏中に、

聖衆来迎を感見、一幅の絵に表現せられた。現在も恵心の来迎図としてたたえられている。

正暦甲冬十二月は、不二の丘で、阿弥陀如来が、両峯の間に映現を感得、現在も山越の弥陀と讃えられ、迎接会の始まりとなっている。九百余年前の御方と思われない親近感の深い高僧である。

念仏の宗祖法然上人は、『往生要集』について、もはら喜導和尚の釈義をもて、指南とせり。これにつきてひらき見給に、かの釈には、乱想の凡夫、称名の行によりて、順次に浄土に生ずべきむねを判じて、凡夫の出離を、たやすくすすめられたり云々と、見える。後白河法皇の勅請で、各宗高僧が順次に『往生要集』を講じて後、感想をのべられた時、法然上人は、

往生極楽の教行は、濁世末代の目足なり。道俗貴賤、たれか帰せざらんものと、よみあげられた時、はじめてきこしめさるるやうに、御きもにそみて、たうとく、御感涙はなはだしかりけり。

と御伝にあり、宗祖大師以前における念仏信仰の第一人者であった。

我々も聖衆來迎図を拝んでは、自然に称名念仏がでてくる。これはまさしく、凡夫男女往生への有難い手引きである。

恵心僧都は姓を卜部(うらべ)、大和国葛下(かつらもと)郡当麻の人で、父を正清母は清原氏であった。夫妻子にめぐまれず、郷の高尾寺観世音に祈って懷妊、天慶五年の誕生である。

僧都は子供の時から容姿きわめて端正であった。ある日高尾寺に行き経蔵に入ると、大小種々の鏡がある。一僧から一個を与えられた。僧都は鏡を見て、「小さくて曇りがあったので、私には大きくて曇りのないのを下さい」と願う、僧は「持ち帰り、横川に往き磨き給え」と教えられると夢がさせた。母に夢の話をする、母曰く「鏡は知慧のしるし、明らかなものは磨くに及ばない。汝は小供であり、知識が乏しい云はば曇るようなもの、叡山の横川で磨くがよい」と解説された。

当時の当麻の里には、二流の小川があった、南はニゴリ、西の川は、清い流れである、村の小供達の遊び場であった。

ある日旅僧が流れで、鉢(はち)を洗う、偶然にも恵心僧都源心が傍らで見っていた。

源心は「その水は濁り汚ない。あちらの水は清いから、あちらで洗うとよいでしょう」と、いった。

僧はたわむれに、

諸法に、浄と不浄はない、何ぞ清濁を云うや

という。源心は、「浄不浄がなければ、洗わずともよいではないですか」といってうつむいて河原の小石を拾う。

僧は愕然として、姑く見ていたが、源心が小石を数えるのを見て、

一から九まで、皆(つ)の音がつく、只十ばかり

(つ)の音なきはいかん

源心ニコリとして、

五の数には、つの数が二つあり

旅僧は、この答をきいて肝(きも)をつぶして、眞の法器なりと、師の良源師に報告し、使者を恵心の母に送り承諾をうけ弟子とした。良源は慈覚大師(元三大師)であって、高僧は法器の弟子育成につねに配慮していたのである。

(体) (験) (随) (想)

アメリカで教えられた私の宗教



二本松 嘉 瑞

(元映画製作者)

「あなたの宗教は……?」

「仏教です」

「ご宗旨は……?」

「はい、浄土宗です……」

現代の日常生活の中で、こんな会話が交されることは、特別な場合を除いては滅多にないことではないでしょうか。

特別な場合の一つを普通の市井の中から拾ってみ

ると、ある家で不幸が起きて、葬儀社を呼んだ時、葬儀社の人との間で、

「……お宅は何宗でございましたか……」

「あーと、うち、何宗なのかな……」

「では、お宅のお寺さまはどちらで?……」

「うちは、集団墓地の〇〇霊園で、決まったお寺なんてありませんが……」

「では、先代様のご位牌でもございましたら、拝見

させていただけでしょうか……」

「うちは分家なので、まだ、仏壇なんかありません。神棚はありますがね……」

「では、神式で……」

「いや、葬式はやっぱり、世間様なみに仏式の方が……」

「では、お経の御坊さんも私共の方で呼びいたしましょうか」

「そう、お願いしましょう……」

不思議なようで不思議でない現代の一場面がある。様にも思えるのですが、というのは、お葬式はお寺で、結婚式は神社で、と決められた方程式のようになっている、こうした習慣が何時頃からできてしまったのかは定かではありませんが、当り前のようになっているからです。

ある時、教会での結婚式に、所謂、仲人役で列席したことがあります。

私も迂闊だったのですが、教会での結婚式だとは

その日まで知らず仲人として、本当に戸惑ってしまいました。そうした私の様子を見兼ねてか、婿さんのご両親が、

「……実は、教会での結婚式には私共は反対したのですが、若い者同志が、かつこが良いから教会でするって言って、どんどん進めてしまったんです。クリスチャンでもないのに、いや、クリスチャンになったのかな、私共は分かりません。そんな訳で……」と、説明してくれました。

「かつこいいから……」これが教会を選んだ唯一の理由でした。披露宴は中華料理でした。お色直しで、和服姿に着替えた新郎、新婦はそこでウエディングケーキにナイフを入れました。

私もいささか驚きましたが、司会の人も氣になったのでしょうか、「……東西にこだわらず……」といった言葉をはさんで、進行に努めていました。

お寺も神社も数会もそれぞれの宗教的背景があり、結婚式、葬式もそうした背景にのっとって、行われる儀式であることは、今更、事挙げて言うこと

もない当り前の事ですが、実際に当面した前記の結婚式はどう考えたらいいのでしょうか。

葬式、結婚式との「式」とは、日の丸の旗、君が代を歌っても問題になる卒業式の式と同じように、一種の単なるデモンストレーションで、そこに宗教的背景がどうのと言う方がおかしいので、どの様な形式でもそれに自己満足すれば、拘りなく、自由に選ぶ、それでいいではないか、と受け止め、理解し、また、いいとか、悪いとかは別として、それが現代流なのだと諒解すべきものなのではないでしょうか。

一方、こうした事がなんの拘りなく行われることは、現代の人々の心の中に宗教の占める部分、或は、その必然性に変化が来たしたことの現れとも言えるのではないのでしょうか。かつて、仏教が伝来した當時にもこうした、似たような混乱があったが、時代が経るにしたがって、日本流に、不必要なものは切り捨てられ、都合のよいこと、必要に迫られたもののみが残り、生活、風土に溶けあいながら、人々の

生活の心の背景となつて、現在の日本仏教となつたのでしょうか。

しかし、現代は過去の孤立した島国日本的立場では存在し得ず、一つの地球の上の色々な国々、民族の人々と共存しなければ生きていけない、そうした国際感覚に立つ時、もう一度、原点に帰り、新しい宗教感覚、またその必然性が生まれて来るわけで、そこには、幾多の試行錯誤、反省の繰り返しがあるに違いありません。新生へのプロセスとして当然のことではないのでしょうか。

民衆は言葉ではなく、態度と現実で自己を主張します。

宗教も、人々の心の中の日本仏教もこうした国際感覚の民衆の許で、新生日本仏教の創造へ向かわざるを得なくなるかもしれません。

日本仏教の創造などとやらそんなことをいつてしまいましたが、どうか、誤解なさらないで戴きたいのです。私は仏教にはまるっきりの素人で、私の言いたかった事は仏教に限らず、若い人々の中に潜む

宗教の在り方が、私のそれとあまりにもかけ離れつつある、ということだったのです。

私がこの様なことを考えるキッカケは米国、ニューヨーク、イングリッド地方にあるエール大学で日本語のアクセント、イントネーションについて、講義を受けもっていた頃のことです。

日本語を学ぼうという学生ですから、日本事情を知ろうとすることにかけては人一倍熱心な学生ばかりです。

ある時、私はこんな質問を受けました。

「……日本人の家に招待された時のことですが、一軒の家の一つの部屋に八神棚と八仏壇が同時に二つ飾ってありました。

もう一人の日本人の家に行きました時にも同じでした。その家では、神棚は高い所にあり、仏壇は低い所がありました。私は不思議な気持ちでしたが、その時は失礼になると思って何も聞きませんでした。……この事に就いて、日本人の考えを聞いたのです」

彼等の宗教感からいえば、宗教はその人にとっては唯一絶対のものです。一人の人が同時に違った二つの宗教に帰依するなどということは有り得ないことです。

私は正直、どう説明したらいいのかちょっと戸惑いました。

私は、本地垂迹説を、明治初年まで続いた神仏混淆、そして、明治政府による神仏分離のことなどを、浅学ながら、歴史的な経過を話し、彼等のやがて将来の理解を得るためのヒントを話すに止めざるを得ませんでした。

勿論、彼然にとっても不満足な事だったでしょうし、私にとっても、難題の一つです。

「先生は仏教徒ですか……」

「はい、そうです……」

「何宗ですか？」

「えっ、はい浄土宗です……」

私は思わぬ質問に一瞬、つまってしまいました。

とっさに私の家のお墓のあるお寺が浄土宗であることを思い出し、浄土宗と言ってしまったのです。とっさ、とは言え、私は本当に面映ゆい気持ちに取り付かれました。

「私はプロテスタント、エビスコバル（英国国教会）です。先生は浄土宗、絶対、他力本願……」

それこそ、予想もしない彼の言葉、驚くと言うより私は恐れ入りました。

私は教えられたのです。無自覚の中にあつた自分、そして自分の宗教、仏教、そして浄土宗を……お恥ずかしい話です。

後で聞いたのですが、彼の父は神父で、彼は日本文化史専攻の大学院生でした。

アメリカは多民族国家だからなのでしょう。色々な公式の個人の届けを出す場合、 $\wedge$ 宗教 $\vee$ という欄があります。

私は初め、空欄のままにしていたのですが、ある時から「仏教徒」と書くことにしました。空欄のままにしておくと、無宗教とか、人に知られたくない

宗教とかにとられた場合、人の見る目が違い、また、信用にも拘ることもあり得ることが、それとなく分かったからです。でも、単なる届け出の手段として「仏教徒」と書いたことに正直、何か後ろめたい、面映ゆい気がしてなりませんでした。

それから、私は大学の図書館から仏教に関する本（中村元著『日本仏教史』ほか）を捜して読みました。外国のものを読むより、なんと分かり易いことでしょう。内容が分かったということではありません、分かる事と分らない事がはっきりと分かるということです。日本人だから当り前のことですが、こんな当り前のことで、自分は日本人だったんだと自覚するとは、お恥ずかしいことです。でも、そうだったのです。

「外国に行つて日本を知る」とよく言われますが、私にとっては、外国に行つて——私——を数えられた、といった方がびったりの様です。まことにお恥ずかしい限りです。

連

載

法

話

<4>

ナムアミダブ



一 おチビさんとお念仏

幼稚園のおチビさんたちが、三十人ほど増上寺へお参りにきた。

お念仏の話をしてほしいと、園長さんに頼まれていた。

おおむろりょうこう
大室了皓

(大本山増上寺執事
東京・品川区光取寺住職)

ハイハイと気安くひきうけたものの前日になって、

「えらいことをひきうけてしまった」

と後悔したものの、もうどうしようもない。

あれこれ考えた末に、

「コンニチハ」

と大きな声で、チビさんたちの前に立った。

彼らも元気に応えてくれた。それに力を得て思い切って話した。

「ダイナマンと、このオジサンと、どっちがつよい？」

「ダイナマン」

テレビで知っているのだ。ハッハッと笑って、大きな声が返ってきた。

「ダイナマンよりズーッと、ズーッと強いものの、知ってる？」

「知ってる。知らない」

答えはバラバラだ。

「よし、教えてあげよう。一番強いのはノノさまなんだよ。そうするとだ。ノノさまとダイナマンと格闘したら、どっちが勝つか」

「ノノさまかなあ」

「ハーイ、ノノさまと思う人、手を上げて」
がやがやして、あちこちから手が上がった。

だんだん解ってきたらしい。

「それでは、ダイナマンよりも、誰よりも一

番強いノノさまと仲よしになりたい人、手を上げて」

一斉に上がった可愛い手を見て、話を続けた。

「では、どうしたら仲よしになれるか教えてあげよう。ナムアミダブと言えがいいんだ。

言えるかな」

「イエル、イエル」

「では私の後について、言ってみよう。ナムアミダブ」

私の手振りと共に、可愛いお念仏の合唱が起こった。

「よくできました。もう一度、言ってみよう。今度はもっと大きな声を出そうね」

大きな本堂にチビさんたちのお念仏が響き渡った。

もう一度、もう一度と、五回ほど繰り返したところで、

「さあみんな、奥のノノさまを見てごらん。笑っている？それとも怒ってる？」

わかんない、という声も聞こえたが、

「笑ってる、笑ってるよなあ」

「そうだ、ノノさまは、笑ってるんだ。ボクたちと仲よしになったんだぞ」

本尊さまを指さしてガヤガヤ始めた。私はさらに続けた。

「これはね、呪文なんだよ。おまじないだぞ。おともだちとカケッコする時だって、この呪文を唱えると勝っちゃうんだぞ。力がもりでてくるんだ。だって、仲よしノノさまが助けてくださるからだよ。」

では、もう一度、大きな声で私と唱えてみよう。ナムアミダブ」

本尊さまが本当に、笑っておられるような気がしてきた。

二 金縛り(かなしばり)とお念仏

芝のある中学校の三年生担任の先生から電話がきた。

入試を十日後に控えた生徒が、金縛りにあ

って夜も眠ることができずに困っている。助けてやって欲しい。

学力は心配ないが、このような精神状態では、合格はおぼつかないだろう。親までがノイローゼ気味で、途方にくれているという。

母親にきてもらった。

一月ほど前から、夜中におきるようになった。それが怖くて、家中の電燈を消させない、トイレでさえ点燈させたままにする。

何かたたっているのかと気になって、仏壇の向きを、あちこちと替えてみたり、拝みやさんに頼んでみたりしたけれども、さっぱり効き目がない。

子供は夜中の金縛りが怖くて眠ろうとしない。

睡眠不足のため学校では満足に授業が受けられない。

入試が心配になって、ノイローゼになり、回りに当たり散らすようになってきた。穏やかだった家庭が荒れてきて、笑いが消えてし

まった。

子供を学校に出した後、夫婦で頭をかかえるようになった。

長男なので、高校入試は初めての経験で、どうして良いものやら、このままでは地獄だ。

「どうぞ助けて下さい」

と頭をさげる母親が哀れになってきたので、あまり自信はないが、

「解りました。何とかしてあげましょう。お子さんを連れて来なさい。そう心配することはありませんよ」

その翌日、親子でやってきた。

立派な体格の男の子だが、気は弱そうだ。

初めての子なので親が甘やかしていたのだから。

「夜中に、はっと気がつく、鎖にでも縛られているように、手も足も動かなくなり、声を発すると思っても、一言もでません。それにもっと怖いのは、誰かがそばにたっているんです」

「ほんとに立っているの」

「そんな気がするんです。だから夜が怖くて……」

「金縛りは、何十分も続くの」

「いいえ三分ぐらいかな。はっきり解りませんがそんな長くはありません。でも怖いんです」

「すんだ後はどうなの。体のどこかが痛いとか、息が苦しいとか」

「汗が出たりはしますが、痛いとか苦しいとかいうことはありません」

「一晩に何回ぐらい」

「一回か、二回かなあ」

「それはそうと、進学のことで悩んだらう。先生やお母さんにはいろいろ言われるし、勉強は思うようにできないし。この一月ぐらい前から大変だったろう。夜中にふと目が覚めて、あれこれ考えると、眠れない夜が続いたろうね」

初めからうなだれていて、漸くこれまで聞

き出すことができたが、はじめて明るい声で答えてくれた。

「はい、そのとおりです。先生どうして解るんですか」

「君の顔をみていると、そのくらいのこととは解るんだよ。だって君の顔にちゃんと書いてあるもの」

「本当ですか、どうしてかなあ」

だんだん明るくなってきた。

「だって、私は先生なんだよ。当り前のことだろう」

なるほどそうかと言うように、深くうなずいていた。

「君はスポーツやっていたよね。陸上だっかねえ。練習で疲れた時など、足がつることがあるだろう。」

「あります」

「だけど少し我慢してると治るよね。そして後はなんでもないよね。」

それと同じなんだよ。進学のことで、頭が

疲れたんだ。だから頭がつったんだ。

頭がつれば、体が動かなくなるのは当り前だ。

金縛りがやってきたら、そのままじっとしていなさい。たった三分ぐらいのことだ。

頭がつってきたな、直ぐなおるぞ、と自分に言い聞かせて、我慢してみなさい。

お母さんがいろいろ心配しておられるようだが、たたりなぞは絶対にない。

それはそうと、ナムアミダブって知っている」

「知っています。祖母がよく唱えていましたから」

「金縛りの時、誰かがいるみたいだと、言っていたね。」

もし怖かったら、その時にだ。おばあちゃんが唱えていた様に、ナムアミダブと一生懸命に唱えてごらんなさい。

絶対に大丈夫だ。何も心配などはないよ。練習してみるか。先生の後について言って

みよう。できるよね」

どうするかなど、多少の不安があったが、かれは、はつきり唱え、にこにこ顔になって帰っていった。

それから一月ほどたってお礼に来た。

合格しました、と言って。

なお、親には「たたり」のことなどは、決して、子の前で口にしてはならないと、厳しく言い聞かせておいた。

(了)

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、松浦春子先生の清楚な作品を昨年とは色調を変えて頂戴しております。今回も松浦先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただきます。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―一六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七



江戸物語

(5)

江戸歌舞伎

細^{ほそ}田^だ隆^{りゅう}善^{ぜん}

(併号・豊明)

江戸歌舞伎は、世界演劇史上その特殊性を注目された演劇であり、現在もこれが伝承されており、国は伝統歌舞伎の保存の意味で若干の支援を続けているものである。江戸歌舞伎は、世界一の人口であり、一大消費都市である江戸の特色のある都市を背景として発展をしたのである。

歌舞伎は、江戸時代「伎」を「妓」と書いたが「かぶく」が語源、かぶくは傾くこと、異常なこと、唄や踊り

江戸は全国総城下町
江戸は世界一の人口
江戸は日本の縮図
江戸で日本の富の半ばが消費
江戸文化の出現

や所作が普通でなく、人目を引くということからできた言葉である。歌舞伎はその三つの文字が内容をよく表わ



——猿若町の賑わい（広重画）——

している。歌は音曲や唄、科白せりふであり、舞は舞踊であり、伎は演技である。

慶長八年（一六〇三）江戸に幕府が開かれた年、出雲乃阿国おくにが京都において煽情的な芸を始めたのが最初であり、平和な時代が続きだしたのでこれが大流行した。それ以前においても遊女たちが歌舞音曲を奏したことはあったのである。しかし遊女が主役の女歌舞伎おんなは風俗を乱すという理由で寛永六年（一六二九）禁止された。このため若衆が女役をする若衆歌舞伎わかしゅうが盛んとなった。これが歌舞伎の女形おやまが出現する第一歩であった。ところがこの若衆が男色だんしよくに縁りがあつて風俗を乱すという理由で承応元年（一六五二）禁止された。以来女性も若衆も出演させない野郎歌舞伎やろうとなり、歌舞伎は男性だけで演ずる芝居となり、女形の異常な発達が歌舞伎の重要な特色となつて現在に続いているものである。

歌舞伎は芝居ともいうが、芝居は「しばや」又は「しばい」といい、芝居小屋がつまんでできた言葉という。もと芝生の上で見物したからできた言葉、芝居は芝居小屋とそこでの演劇をいうようになった。歌舞伎は和事わごとを中心とする京都大阪の上方歌舞伎かみがたと武家の町の江戸にお

いて荒事を中心とする江戸歌舞伎の二つの流れとなった。江戸の繁栄に伴い江戸歌舞伎が大発展をするようになった。

江戸の芝居は、官許の大芝居の外に寺院神社の境内などで興行される宮地芝居や小芝居があった。江戸は全国からの武家や町民が集散するところであるので、江戸でヒットした歌舞伎は忽ち地方に伝播し、地方都市の芝居さらに地方村落の村芝居に影響を与えたものである。江戸には次の四座があった。寛永元年（一六二四）創設の猿若座（後の中村座）、寛永十一年（一六三四）創設の村山座（後の市村座）、寛永十九年（一六四二）創設の山村座、万治三年（一六六〇）創設の森田座（後の守田座）である。このうち山村座は正徳四年（一七一四）絵島生島事件によって断絶させられて江戸三座となり、明治初年まで続いたのである。

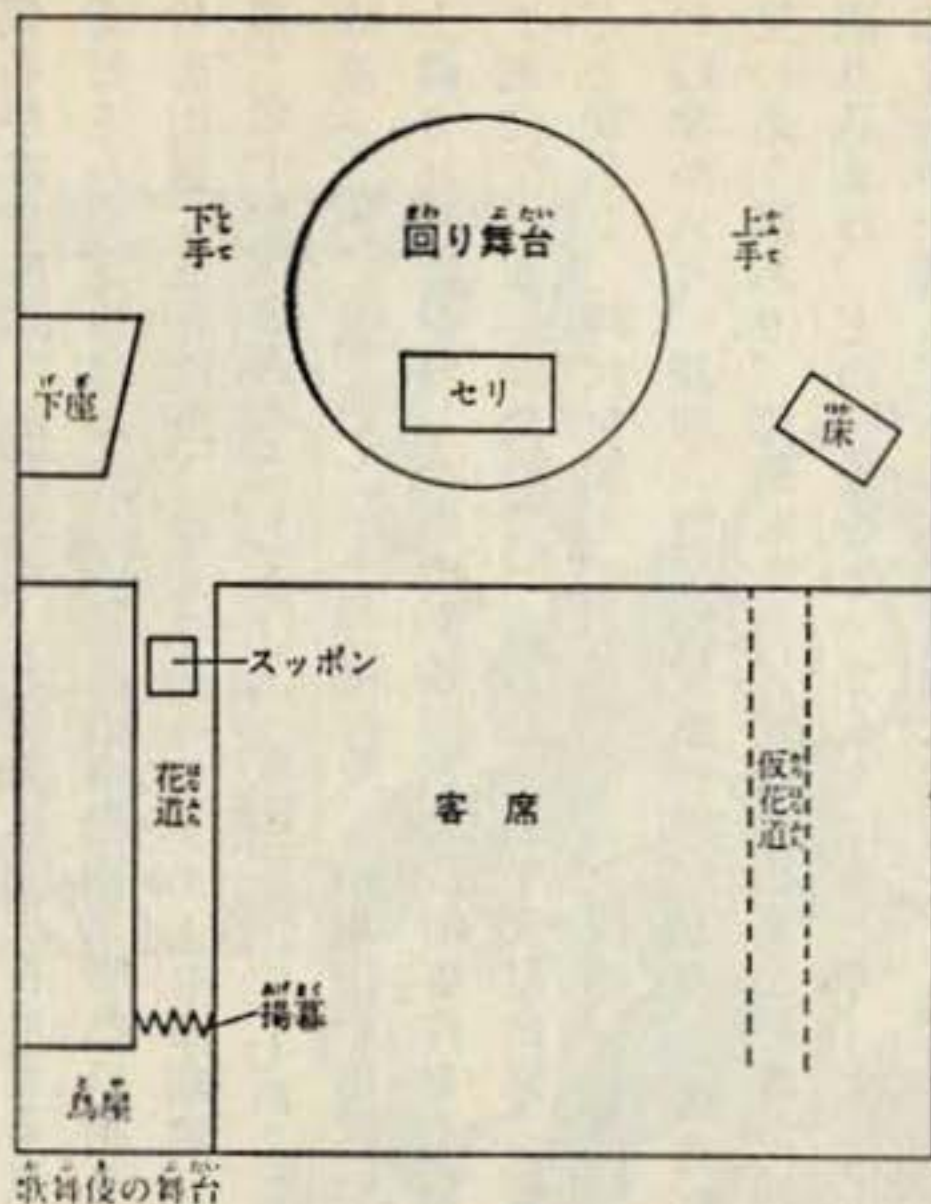
猿若座（中村座）は中槽から禰宜町へさらに堤町に移り、村山座（市村座）は葺屋町、山村座と森田座は木挽町にあった。いずれも江戸城近くの現在の中央区にあった。天保十三年（一八四二）水野忠邦によって江戸三座は取り潰されるところを助かり、浅草聖天町（台東区）に移

転した。中村座は猿若町一丁目、市村座は同二丁目、森田座は同三丁目であり、現在の台東区浅草六丁目である。これを猿若三座ともいう。三座の座元は中村勘三郎、市村羽左衛門、森田勘弥が代々世襲制度によって受けついだ。猿若町は江戸レジャーのメッカであり、大変な賑わいであった。その上近くに浅草観音や吉原の遊廓があったので一層の賑わいであった。中村座は明治二十六年焼失廃止、市村座は名称が変わり昭和七年焼失廃止、森田座は新富座となり明治二十八年守田家から離れた。市村座の跡には由来碑があり、藤浪小道具店があった。歌舞伎演劇関係の小道具一切を仕切っている。

芝居小屋は当初は葺簀張りであったが、しだいに立派な建物になった。中村座を例にとると享保以降は瓦葺の大建築となり楽屋は三階建てになった。享保五年（一七二〇）舞台は三間に四間、東棧敷十五間、西棧敷十六間、向棧敷九間、土間は八間に十三間であった。文化六年（一八〇九）には間口十二間半、奥行二十一間、高さ二丈八尺七寸という広大な芝居劇場であった。舞台もいろいろ考案されて、回り舞台、セリとスッポンの迫上げ施設、花道、仮花道、音曲の下座、床などが装置された。しかし

回り舞台や迫上げは全て人力で動かしたものである。

江戸時代芝居興行は昼間だけ、午前六時から午後五時までである。一番太鼓は午前二時、二番太鼓は明け方に鳴ったものである。棧敷の客は茶屋から入り、切落し（一般席）は木戸から入った。茶屋は劇場の付属施設で、一座に十軒から二十軒もあって建ち並び、茶屋には大茶屋、小茶屋、水茶屋の区分があった。大茶屋は最高級、



歌舞伎の舞台



——市川團十郎「暫」(国政画)——

芝居がはねてから主客は役者を招き、芸者を呼んで宴会を催したものである。絵島はこの宴会での生島との出会いのため城への帰宅が遅れて事件となった。棧敷客へはつまみと酒、昼食には幕の内弁当に口肴、午後には鮎と水菓子が茶屋から運ばれた。一般席は菓子、弁当、鮎がでたもので一枰七人詰で窮屈であった。芝居見物は早朝から一日がかり、遠くからは二日がかりであったが、豪華な楽しみであった。

江戸歌舞伎の黄金時代を作った出し物をあげてみる。

仮名手本忠臣蔵 演劇史上、忠臣蔵ほど現在に至るまで愛好された芝居はない。赤穂浪士の史実と脚色に基き、竹田出雲、三好松洛、並木千柳の三人が人形浄瑠璃（文楽）全十一段を脚本として作り、寛延元年（一七四八）竹本座（大阪）で初演したものである。のち江戸において上演され好評を博したのである。当時政治事件をそのまま劇化できなかったので、大石蔵之助を大星由良之助などと変名し、時代を変えて上演した。全段が、春夏秋冬の四季が入り、義理人情、恋愛あり悲恋あり、和事荒事、笑いあり涙あり、舞踊もあり、芝居に必要な要素が全て織り込まれ、どの一段をとってもすばらしく、全体を通じて筋が一貫して、演劇史上比類のない名作である。

暫 初代市川団十郎が元禄十年（一六九七）初演した歌舞伎十八番の一つ、荒事の代表作である。二メートルの大太刀を抜き大仰な隈取で、大声で叫び悪人たちを忽ちいためつける点がすばらしく、当時武家権力に対する抵抗思想を鎌倉権五郎景政の勇武を誇張して演出したものである点が人気を博した。

助六由縁江戸櫻 歌舞伎十八番の中でただ一つの世話物

として特色を持ち、正徳三年（一七一三）山村座において二世市川団十郎が初演した。豪華な衣装の吉原太夫の揚巻と駒下駄、蛇目傘、紫の鉢巻、きりりとした啖呵の荒若衆の助六の対比が受けた。助六によって江戸では江戸紫が流行したほどの人気であった。

幡随長兵衛精進俎板 初世桜田治助の作、浅草花川戸（台東区）の俠客、町奴の頭領、幡随院長兵衛と旗本水野十郎左衛門を対決させ、旗本奴と町奴の対立を戯曲化したものである。武家に対する江戸町民の反抗精神が大いに受け、五世市川団十郎が好演した。

五大力恋緋 初世並木五瓶の作、寛政七年（一七九五）大阪都座において初演、五瓶が舞台を大阪から江戸深川に書き替え江戸で大当りをした。薩摩武士の痴情殺人事件を脚色、世話物の傑作である。

色彩間苺豆（かさね）二世桜井幸三の作、文政六年（一八二三）初演された四世鶴屋南北作の怪談劇「法懸松成田利剣」の発端部分の凄愴な舞踊劇である。南北の出現によって江戸歌舞伎に一段と怪談劇がもてはやされるようになった。

東海道四谷怪談（お岩）大南北と称せられる鶴屋南北の



——忠臣蔵の定九郎（市川團十郎）と
大星由良之助（坂東三津五郎）、（国貞画）——

生世話狂言の代表作であり、わが国怪談劇の代表作でもある。

文政八年（一八二五）中村座において初演、江戸の地名と実話の脚色を織りまぜた江戸歌舞伎の傑作である。戸板返し of 凄惨な場面は当時のままの演出で現在も伝承されている。以来お岩は幽霊の代表となった。

与話情浮名横櫛（切られ与三） 三世瀬川如皐の作、嘉永

六年（一八五三）中村座において初演、粹な与三郎が江戸下町情緒をかもしだし名科白が好評を博した。

勸進帳（弁慶） 三世並木五瓶の作、歌舞伎十八番の中でもっとも上演回数が多い名作である。能楽の「安宅」を歌舞伎の中に取り入れることに成功した七世市川団十郎が、天保十一年（一八四〇）河原崎座で初演した。弁慶は荒事の代表役、荒事の見得、舞踊、名曲といわれる長唄、勇壮な六法の花道等々が折り込まれ、江戸歌舞伎の代表でもある。

三人吉三廊初買 河竹黙阿弥の作、万延元年（一八六〇）市村座において初演、幕末の因果物語であって「月もおぼろに白魚の……」の名科白の序幕の「大川端」だけがよく上演された。

以上が江戸歌舞伎の代表作であるがまだまだ数多くの

作品がある。戯作者にも名人が輩出し、演技のすばらしい歌舞伎役者が数多く出演して江戸歌舞伎の価値を高めた。評判の役者は時の人であり、年間契約千両の役者も輩出したので千両役者の言葉が生れた。歌舞伎芝居は浮世絵となり、役者の持物、衣装をまねたりして、日常生活の中まで浸透していった。つぎに江戸歌舞伎の人気役者をあげてみるが、市川団十郎代々がそのバックボーンであった。

市川団十郎 初代 市川家は代々江戸荒事としてもてはやされた。初代は千葉成田山近くで生れ、不動尊信仰に厚く、成田屋の号をつけるようになった。坂田金時、鳴神、不破、暫、曾我五郎、弁慶などが当り役、俳諧にも秀いで才牛の号がある。宝永元年（一七〇四）楽屋で刺殺された。享年四十五歳。二代は曾我狂言を定着させ、助六を完成し「役者の氏神」と称せられ市川家の家名を高めた。俳号三升は宝井其角から受けた。宝暦八年（一七五八）没、七十一歳。三代は二十二歳の若死。四代は深川木場に住み中村仲蔵など後進を育成し「木場の親玉」と親しまれた。安永七年（一七七八）没、六十八歳。五代は市川家の伝統芸に写実性を高め、又一人七役の早変わり

を考案した。文化二年（一八〇五）没、六十六歳。狂歌にも勝れ、大田南畝、山東京伝、立川焉馬らと交流した。六代は二十二歳で若死。七代は六歳で「暫」を演じた天才。七代は江戸歌舞伎のみならずわが国演劇史上最大の役者であった。七代は荒事、じつごと実事、実悪、和事、色恋、生世話、舞踊と万能の役者であった。とくに歌舞伎十八



番を完成したことは有名である。歌舞伎十八番は鎌髭、不動、関羽、解脫、不破、象引、押戻し、鵬、七つ面、蛇柳、毛拔、鳴神、矢の根、暫、助六、外郎売、景清、勧進帳である。深川木場に住み豪邸を建てたことが幕府儉約令にひっかかり、天保十三年（一八四二）江戸十里四方追放の刑に処せられた。その住居跡は跡方もないがそ



助六

— 東海道四谷怪談
お岩（河原崎国太郎）
伊右衛門（嵐圭史） —

の地点を最近確めえた。七代は安成六年（一八五九）没、六十九歳。八代は美貌と愛敬で人気があり、江戸女性の熱狂ぶりは異常であつたが、安政元年（一八五四）三十二歳で自殺した。その理由はさだかでない。このため熱狂の女性たちが冥土へやるまいとして八代の手を取り帯をとっている光景が浮世絵に画かれるほどであつた。団十郎襲名はその後二十年のブランクがあつて明治七年、劇聖と称賛られた九代があとを継いだ。



——四代中村歌右衛門（芝翫）（国貞画）——



——勅進帳（鳥居清光画）——



——尾上菊五郎（重勝画）——

中村七五郎 江戸歌舞伎の和事の名人、五代まであるが初代と二代が有名。

松本幸四郎 四代と五代が有名、とくに五代は化政期の江戸劇壇の代表役者の一人。当り役は悪役と実事であった。

尾上菊五郎 三代が万能役をこなした化政期の名優。七代目團十郎と南北劇に活躍した。

中村仲蔵 初代と三代が有名。初代は忠臣蔵定九郎の演出を考案した。三代は幕末から明治十九年まで活躍した。
坂東三津五郎 三代が有名。化政期に和事と舞踊で活躍、
深川永木河岸に住んでいたので永木の三津五郎という。
坂東彦三郎 五代が有名。当時花形役者随一と称せられた。

市川小団次 四代が有名、幕末の生世物に活躍した。

瀬川菊之丞 二代は江戸王子に生れ王子路考と称した。江戸生れの女形の第一号、江戸の人気を一身に集めた。菊之丞の俳号路考にちなみ路考茶、路考櫛、美人を何々路考と称したほどの人気であった。

岩井半四郎 四代、五代、八代が有名。四代は生世話のはじめといわれ、五代は女形の全盛期を招来したほどで

ある。とくに「眼千両」ともてはやされた。八代は八代團十郎の相手役をつとめて有名である。

沢村田之助 二代、三代が有名、二代は文化期の名女形、三代は立女形として人気を集め、田之助鬘、田之助襟、田之助下駄などを江戸に流行させたほどである。しかし脱疽のため両手両足を切断された。それでも舞台に出演したことがあるので有名である。

坂東しうか はじめ坂東玉三郎と称しのちにしうかと改め、幕末の名女形として人気を集めた。

中村歌右衛門 二代は敵役の名優、三代も名優、四代は女形をよくし俳号を芝翫と号した。芝翫は深川常盤町に住みその河岸を今でも芝翫河岸という。

中村勘三郎 初代、二代は曾我狂言をよくし、四代は初代中村伝九郎と称して名優であった。

以上江戸歌舞伎に活躍した役者はまだまだあるが、一人の役者に大勢の人がつき添い、舞台の影で活躍したものである。又音曲関係者が大勢協力して歌舞伎芝居を盛りたてたものである。江戸歌舞伎は下町を舞台として発展し、江戸という都市を背景として盛んになった江戸文化の華の一つである。

(つづく)

五月書房選書

大正大学学長・文学博士
全日本煎茶道連盟顧問
装道きもの学院非常勤講師

安居香山 著

正坐の文化

◆煎茶道の文化とその思想◆

■永年にわたり書きためてきた、煎茶道・着物・花・正坐論を一冊にまとめ著者の日本の伝統文化観をここに開陳する。是非
ご愛読下さいますようご案内申し上げます。

●推薦します●

黄 檗 宗 管 長

全日本煎茶道連盟会長

装道きもの学院 理事長

装道礼法学院

村 瀬 玄 妙 貌 下

山 中 典 士 先 生

■内容

一章 正坐の文化

二章 煎茶道の歴史と思想

三章 売茶翁に学ぶ

四章 茶道小論

五章 茶と旅

六章 茶事漫筆

■体裁

四六判／上製／口絵二頁 定価一、六〇〇円（〒二五〇円）

五 月 書 店

〒101

東京都千代田区猿樂町二一六一五

電話 〇三一二三三三三四一六一

振替 東京九一三三九四三

取引銀行 三菱銀行神保町支店

当座番号九〇一二四六三

海と山の狭間で

—究極の花、キブシ—

木^{きの}
下^{した}
隆^{りゅう}
一^{いち}

伊豆の山野が、なんとなく淡いカーキ色のヴェールに包まれると、今年も春が来たなという気にさせられる。ここに移り住んだ頃は芽吹きの色と早合点したが、あたりを見回しても冬芽のほころびた木は無く、何とも不思議でならなかった。伊豆の春は、このようにある日突然やって来るのである。庭の吹き溜りに、茶褐色の糸屑のような物がかたまっているのを見て、それが雑木の花屑と知るまでには時間がかかった。そして、あのカーキ色

のヴェールは、雑木の花粉が飛んでいたのだと気づくまでには、更に二年の歳月を要した。その中には花粉症を起こす、あの忌まわしい杉の花粉も混っていたのだが、その頃はそんなことは知る由もなかった。

伊豆に住んで四年目、三度目の春だった。急に右目が痒くなり、擦っているうちに瞼が腫れあがり、それが翌日には左目にも移って医者に駆け込む破目になったが、「杉の花粉症」と診断されて、初めて花粉症の恐しさを実感した。

「杉の花粉というのはね、水分を吸って膨張し、トゲを出して患部に楔を打ち込むんですよ。特效薬が無いから医者泣かせ……」

ぼやきながらも、気さくな医者は手際よく目を洗い、軟膏をさし、お呪いのように瞼を二、三度軽く揉んでくれた。おかげで痒みも腫れも軽減したが、それでも完治するまでには半月以上かかった。原因が判ったのだから、それなりに対処すればいいものを、翌年もそのまた次の年も、杉の花粉は私の目を直撃した。その年の天候に左右されて、花粉がいつ飛び始めなのか、全く予測出来ないからである。気がついた時はもう手遅れで、

杉の花咲く頃我れの目病み癖

と諦めるしかなかった。

「東京にいる時は、こんな事なかったのになあ」

と言うと、天城山麓、言ってみれば杉花粉飛散の最前線にいますという事実は棚にあげて、「お年ですよ、体質が変わったというより、すべての器官が退化したんですよ」

と、女房はにべもなかったが、退化云々はともかくとして、四十半ばを過ぎてから、食物の嗜好が一変したのは確かだった。その一つの表れが、肉を食いたいという気が起こらなくなった事である。起こらなくなったと言うよりは、無くなったと言った方がより正確かもしれない。そしてもう一つ、以前は見向きもしなかった春菊など、独特の匂いを持つ野菜に食指が動くようになった。急に嗜好が変わったので、

「癌にかかる、食べ物好みが変わるんですって」

と、女房は珍説を唱えて嫌みを言うが、気にしないで、ミツバ、アンタバ、タラノメ、ウドと、香り高い野草を摘んで来ては賞味している。有難い事に、伊豆の山野は季節になると、これらの物をせっせとプレゼントしてくれるのである。こういう物を食べていれば、殊更健康に留意する必要は無い。その証拠に、摂生に務めている訳でもないのに、このところ数年血圧が上がる事もないし、体重の増減もなく、六十キロ前後で安定している。

私が海辺に永住の地を求めたのは、海がもたらす様々な食品に目をつけたからであった。そんな事は先ずあるまいが、地球が大凶作に見舞われても、海が真水に変わらない限り、人体に必要な塩は確保出来るし、岩場では貝や海藻が採れる。また、お数にするくらいの雑魚は釣れるだろうと考えたからである。現に同じような発想から、財をなした男がいるのである。近くの川奈港にAという味噌汁屋があって繁盛しているが、あるテレビ番組で「材料はこの目の前の海で採れた物ばかりだよ」と、この家の主は嘯いていた。成程、食卓にずらりと並べられた三十ほどのサンプルは、上は伊勢海老から下はアオサに至るまで、

親爺が言うように海から採れた物だけを汁の実にしていた。都会人は車を連ねてやって来て、大枚払ってそれを食い、自然の味だと有難がっている。私も一度物は試しと、今ほど名前が売れていなかった頃訪ねた事があるが、応対に出た従業員の態度が横柄だったのに嫌気がさして、一度と足を運ぶ事はしなかったが、先日久しぶりに店の前を通りかかると、ブラックまがいの別棟を建て、拡張した駐車場には溢れんばかりに車が停っていた。

「たいしたものだな」

と感心すると、女房は笑って言った。

「発想は同じでも、商売に結びつけるかつかないかで、この違い。もっともあなたは考えただけで、まだ一つも実行していないんだから」

言われるまでもなく、行動が伴わないのが私の欠点であるが、「俺は軍師はやってても大將になる気はない」と言おうとして、危うく言葉を吞んだ。私の発想はあくまでも有事に備えての事、というのが女房には判っていないと判断したからである。嗜好の変化という事から、話が思わぬ方向にそれてしまった。元に戻そう。

淡いカーキ色のヴェールは、肌で感じられる訳ではないから、その中にいても霞同様に包み込まれているという感覚は無いが、キブシが枯枝に葡萄の房に似た萌黄色の花房を垂らし始めると、伊豆の春は本格化する。私が一番春の到来を感じるのは、このキブシの花を目にした時である。花の一つ一つは見栄えのする物ではないが、それが集まって房状をなすと俄然光彩を放って、私には宝石に見えてくるのである。アジャンタの石窟寺院の壁に

描かれていた美女が、この花房に似た瓔珞をいくつも胸に飾っていたのを思い出す。八年前、インドの旅から帰って来て、初めて私はこの花の存在を知った。そして美しいと思った。「どうして、この花が俳句の季語になっていないのかなあ」

と言うと、女房はさらりと言って退けた。

「万人が認めない限り、季語として成熟しないんじゃないかしら。これを見てもなんにも感じない人が殆どで、枝から何かぶらさがっていると思う人は少数派。美しいって感じるのは、あなたぐらいじゃない？ あなたは壁画の美女から連想して、美しいと思っているだけじゃないんですか」

女房の言に触発された訳ではないが、以来春先になると、私は句作に意欲を燃やすが、試行錯誤を繰り返すだけで、いまだに、一句も物に出来ないでいる。かくしてキブシの花は、私の終生の課題になってしまった。

キブシⅡキブシ科の落葉小高木。高さ二―三メートル、山地に生ずる。春、葉に先立って黄色花を穂状に垂らす。果実を粉とし、五倍子の代用として黒色染料とする。マメブシ、漢名通条花——と広辞苑に記されているが、「黄色花を穂状に垂らす」という記述には、花の色とその形状に関する表現にいささか疑問が残る。と同時に、文中の五倍子が、山本健吉編の「最新俳句歳時記」によれば、「白膠木の葉に三センチばかりのものがでざるの言う。初めは緑色で、紅い暈^{かき}があり、後、茶褐色となる。五倍子虫（油虫の一種）が生みつけた卵が孵化して生じたものの、中に粉糖のような虫がたくさん入っていて、その

虫が殻を破って出ないうちに採取して、昔はお齒黒を染めたが、今はタンニン材として、薬用あるいはインキの原料とされる。白膠木は秋の紅葉が美しい」と解説し、秋の季語と知っているのを知った時、家の周囲の雑木林の中で極く普通に見られる物であっただけに、あの霰餅のように膨んだ葉の中味が五倍子だったのかと、私は悟った。お齒黒の原料が鉱物でなく、虫だったというのは意外であった。しかしバイテクテクノロジーはやりの今日、はたしてこのような天然の材料が、インク製造などに用いられているのであろうか。

またまた話がそれてしまったが、キブシの花がどのように散り、どんな実を結ぶのか私は知らない。ふと気がつくと、花房は若葉の中に姿を消しており、木もまた他の雑木に紛れてしまつて、見分けがつかなくなつてしまつていゝからである。今年是一本の木に絞つて、徹底的に観察し、果実の粉がどんな黒色なのかを究めたいと思つていゝ。出来れば五倍子の黒も採つて、両者の色の違いも考察したいと思ふが、なにしろ行動力が伴わない私の事ゆえいゝかが相成りますことやら……。

キブシの花にうつつを抜かしてゐるうちに、淡いカーキ色は新芽の萌黄色のヴェールに変わり、桜が天城山麓に花の雲を引いたかと思ふ間もなく、旬日を経ずして、山は濃淡色とりどりの若葉に覆われているのである。伊豆は若葉の頃が一番美しい。足早な季節の移ろいに見惚れてゐるうちに、若葉はいつか新緑に、そして山は深い緑を滴らせるようになる。やがて、いくたびか走り梅雨が過ぎると、伊豆は、伊豆の花とも言える「あじさゐ」の花盛りを迎えるのである。

開眼供養の記録はないが、この年号を上元と改めた前後は、唐王朝にとって「最良の年」であった。

朝鮮半島へ遠征していた李勣將軍の軍隊は高句麗を滅し、さらに新羅の各城も抜いて、朝鮮半島は完全に征服され尽くした。北の突厥族も蹂躪され、西の吐蕃国や于闐国もしきりと和を請う使者を派遣してきた。

一代の英傑、唐の太宗を以てしても為し得なかった外域の脅威を、病身の高宗はたちまち除去してしまったことになる。好運なのか、永年にわたって蒔いておいた「四隣安保」の業が一気に結実したのであるか。

則天武后はこの偉業を、自分の内面で深い懺悔心をおこしたことになる効顯である、と信じたにちがいない。同時に外域の調伏に生命を捧げた将士の霊を慰さめる供養も忘れてはいなかった。

「大盧舎那像龕記」は「奉勅檢校僧西京實際寺善道禪師、法海寺主惠暕法師」に続いて、

「大使司農寺卿韋機、副使東西監上柱国樊之則……」とか支料匠として李君瓚、成仁威、姚師積などの名前を列記する。外構の造営に従事した功臣たちである。

とりわけ大使に選ばれた韋機は、遠く貞観八年（六三四）に先帝太宗の命令で西突厥へ使者となって赴いた。

唐の西方から北へかけては強大な異民族が蟠居していた。北の突厥族（現蒙古）西南の吐蕃国（現チベット）である。これらは太宗の在世時、軍威政略によってほぼ調伏が成った。ところが突厥の西方地域に同種同血の強盛を誇る夷狄がいた。西突厥と呼ばれた。

西突厥の領土は中央アジアのトルコ人の国エフタルを併吞してインドと国境を接し、さらに西へ伸びてペルシャを征服して東ヨーロッパのローマ帝国とも通じていた。

韋機が西突厥の首都吹河の集落に滞留中、大酋長の咄陸可汗が死んだ。これを継承した弟娥設（沙鉢羅咄利失可汗）を韋機はよく補佐

して唐の軍事、政治組織をこれに教えこんだ。

ところが幾ばくもなく、現露領タシケント付近を拠点とする蕃族が攻めこんできた。韋機はこの反乱軍の囚虜となり、三年余も西突厥各地を引きまわされた。彼らは特定の地点に定着しない放牧民だったからである。

韋機は当時、左千牛胃曹という禁裡の近衛隊長の身分だったが、学があり、この囚旅中に見聞を引き裂いたおのれの「裳」へ克明に書き誌るしておいた。

反乱と大酋長（沙鉢羅咥利失）との和議が成立し、伊麗水を境界に版図を二分することになった。やがて韋機は長安へ帰ることができた。

帰国後、囚旅中に誌るしたものを、「西征記」としてまとめた太宗に献じた。これが西突厥調伏の重要な資料となった。

高宗の顯慶二年（六五七）大將軍安撫使蘇定方は大軍をひきいて西突厥へ攻めこんだ。ま

ず大酋長軍を破って伊麗水東側を制圧し、降伏した突厥軍を吸収しながら西へ進撃、石国（タシケント）へ迫った。そこには真珠葉護と名乗る大酋長がいた。

蘇定方はいったん兵を引き、一年余りの休養を兵に与えたあと、再度進撃して真珠葉護軍を雙河畔で潰滅させ、大酋長の首級を挙げた。顯慶四年の春三月だった。

この大勝で、韋機にも司農少卿の栄位が贈られた。そのころ韋機はすでに老境となっていて、専ら宮繕の仕事に任じていた。長安城の園苑や上陽宮の造営を検校した。

こんどの大廬舎那仏造像にもその外構を検校する「大使役」がふりあてられたのである。「奉勅検校善道禪師」の役がいかに重い職責であったかが領解できるであろう。

則天武后は、この造仏を自己内面の改新と外域制圧の完遂という両面にわたる「大業の象徴」としたかったようである。

造仏が殆んど成らんとした上元元年（六七

「噂はどうあろうとも……」

たしかに、そんな流説が長安や洛陽の宮廷内外で執拗に語り続けられている。「資治通鑑」が伝える「己亥、太子、合璧宮ニ薨ズ。時人以為（おもえ）らく、天后、之を酖せりと」どの風説が根付いてしまおうとする昨今でなかった。

少年憚良は何としても伯母を弁護したい。身蟲氣からではなかった。大盧舎那仏の造像を決意、善導の前で心から懺悔した伯母の姿を目撃しているのである。憚良はあの則天武后を信じたかった。

「次は賢太子の番だ、とみなは申しておる。そんな気ぶりは感じられないかな」

実子の李弘を殺したのだ。当然、継子の李賢も生かしてはおくまい、と世間は取沙汰する。厭勝師としてはこの宮廷内の世論（？）に便乗して何とかおのれの地位を強化しようと策しているにちがいない。

「気ぶりも何も……賢太子さまは、ずっと長

安城に御滞在のまま洛陽へは姿をおみせになりません」

明崇儼の言いがかりめいた臆測を一笑に付しながら、しかし憚良はふと王徐明の顔を思いうかべていた。

あの方士が武后と妖しい関係を結んでいることは、少年の眼ですでに確認されていた。問題は二人でいつも逢曳を楽しむ場所であった。

そこは則天武后が継子の李賢のために新築してやった書斎なのである。書物好きの賢太子を思つてのことだ。ところが、この甥っ子はさっぱり洛陽へ姿を現さない。大盧舎那仏を造つてその亡き母韓国夫人を心から供養しているのに、いや李賢を皇太子に立てたこと自体が武後の懺悔だったのに、相手はこの母后ならぬ叔母に顔をそむけっ放しなのである。

武后が大盧舎那仏の完成を目前にして、方士の王徐明と道ならぬ愛慾へ浸たりこんでし

まった心情の裏で、太子李賢の姿が揺曳して
いたことはまぎれもない。さらには新太子に
密着して洛陽城を離れようとはしない夫君高
宗への嫉妬も見逃してはならないであろう。

だから憚良は伯母を憎めなかった。

「天帝は近々に王位を賢太子に譲位するおつ
もりではないだろうか」

「さあ、そんな話は聞いておりませぬ」

「この前、弘太子の場合にもそんな噂が立つ
て、死を招いたのではなかったのかな」

厭勝師はトボけた口をきくが、とことん知
り尽しているようだ。

たしかに高宗は、皇太子の李弘が急死した
あと「朕まさに位（王位）を皇太子に禅（ゆず）
らんと欲せり。而るに疾（や）みて、にわか
に起たず。宜しく往命を申すべく加うるに尊
名を以てすべ諡し。（おくりな）して孝敬皇帝
と為すべし」（『資治通鑑』）と詔を発したもの
である。高宗には李弘へ譲位の意志があった。
それが急死である。

逆な見かたをすれば、高宗譲位の意志は則
天武后自身から発したとも考えられる。血を
分けた実子である。それがむしろ自然の情で
あろう。

宮廷内には武后の専横を憎む勢力が、相変
らず衰えなかった。彼らは皇太子弘を毒殺
し、その下手人が則天武后であるかの如く風
説を飛ばす。この独裁女性を底なし沼へ引き
ずりこむことができる、と計算したのかもしれ
ない。

則天武后が、血を分けた第八子李哲をかえ
りみず、わずか二歳年上だけの亡姉韓国夫人
の遺児李賢を立太子させた真意もこうした
「敵」との闘いにうち克った手段だったので
はあるまいか。

闘いに勝利するためには、つねに「敵」の
意表を衝かねばならない。

「天帝が譲位のことを口にされれば、天后も
賢太子を殺し易くなる」

明崇儼は毒をふくんだ言葉を容赦なく吐き

出した。近ごろ、則天武后の寵を王徐明に奪い去られた鬱憤が爆発する。

「そのことを天后さまに申上げてみましようか」

惲良も皮肉をこめた口けきけるようになってる。

「嘘、冗談じゃ。そんなことが天后のお耳へ届いたら、こちらの首が飛んでしまうわい。

それはともかくとして、天后はいつ西京へ出立されるのであろうか」

あわてて話題を切りかえてきた。

「数日うちにとのことでございます。天帝のお病いが……」

「そうか、わしもお供しないとな」

則天武后の長安城還御。その供奉予定者のなかに明崇儼の名前はなかった。表面の理由は、この厭勝師がすでに「正諫大夫」なる官位を得ている。この洛陽宮の留守居役をふり当てられた以上、いかに天后といえどもそれを曲げることは許されなかった。

愛寵する側近に公職を冠すること自体が、権力者がその寵臣を見捨てた証固であらう。

則天武后は明崇儼を洛陽宮へ残し、「方士」としては王徐明だけを身近に侍らせて長安城へ出発する予定であった。

十五

則天武后の一行が洛陽宮を離れる日がきた。

大廬舎那仏の開眼供養などでこの宮殿を離れることができず、高宗皇帝の介護もままならなかった。雍王賢太子との仲も調整しなければならぬ。武后の長安城還御には、さまざまな意味合いがふくまれていた。

一行はじかに長安へ入城しなかった。広大な城壁を見上げながら南方へと迂回していった。都の東南に位置している曲江の離宮を目ざした。そこで数日間をすごすことを則天武

のだった。

「此処からも見えるでしょう」

いつのまにか背後に伯母の武后が立っていた。南方の丘を指さした。

「あれは、たしか先帝の御廟、昭陵でしょう」

「それ、右端に新しい石塔が見える」

「ああ……誰の墓塔ですか」

「無忌宰相の陪葬地よ」

無忌宰相——唐創業の功臣、長遜無忌である。太宗の正室文德皇后の兄にあたる。太原の旗上げ以来、つねに太宗の運命を共にし、天下統一を達成させた。

太宗が死んで、高宗が唐の王位を継いだ。

高宗は、実妹文德皇后の遺子であるから長遜無忌の忠勤ぶりは以前に変らぬはずであった。ただ以前の臣下と現在の伯父とでは、立場が異なる。いわんや先帝の功臣ともなれば宮廷を支配できる元老の地位にある。

この立場が、自己の地位保全に死にもの狂

いの則天武后と激変した。武后は巧みな策を組み立てて、まず長遜無忌派と言われる高官たちの足もとをねらった。柳爽や韓瑗らに叛心ありと告発し、累を褚遂良にまで拡大させた。

それでも無忌宰相にまでは及ぶまい、と自他共に安んじていたのも束（つか）のまで、共同謀議の証固を次々にデッチあげて、顯慶四年（六五九）無忌を追放したのだった。

——詔を下して、無忌の太尉及び封邑を削り、以て揚州都督と為し、黔（きん）州において安置し、一品に準じて供給せしむ。

（資治通鑑）

一品の供給とは、毎日白米二升のほか粳米一斗五升、粉一升、油五升、塩一升半などと唐の六典は食料を細かく規定している。毎月羊二十口、猿肉六十斤、魚三十頭、酒九斗で、もちろんその分だけの家族郎党を召抱え

☆☆

龍

登



奇体な艶気がその指先から発して少年の五体を揺さぶるのだった。この女性が持つ恐ろしさであろう。

憚良は、師の善導から「観無量寿経」の講説を聴いた折、胸に泌みとおった人間の煩悩についての話を思いうかべた。

人間には五つの苦がある。生老病死の四苦に愛別離苦の五苦である。

だが、さらに三つの感覚的な苦しみがあ
る。五陰盛苦、求不得苦、そして怨憎会苦である。

とりわけ五陰盛苦は、肉体の炎が求めてやまない煩悩である。これはなまじの理性や悟性では自制しきれない場合がある。

伯母の武后は、いますべてが終ったと悟性へ到達したような表情でいるが、方士の王徐明との不倫をどう解決するつもりなのであるか。

その理性は、病身の夫君高宗の介護にすべてを献げると誓っている。たしかにそのとお

りに実行するであろう。でも生ま生ましい王徐明と向き合ったとき、天后はどうなるのか。

いま指先から流露してくる奇体な艶気、この五陰盛苦はまさに彼女を無茶苦茶にして、おそらく男の胸へ飛ぶこませてしまいうにちがない。

少年の身で、異性との経験を全く持たない憚良だったが、そんな伯母の実像を予見できるように感じられてならなかった。

あるいは、以前よりもっと恐ろしい女身が……少年はもの静かな曲江の水面に突如として巨大な顔が駆け登ってくる幻影を、朝の陽光のなかで見てとった。

(つづく)

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜九枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十三巻 六月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十二年 五月二十五日 印刷

昭和六十二年 六月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

住職待望の回向文集ができました

新 諷 誦 撰

編集 白金ブディストクラブ

監修 竹中信常 大室了皓 山本康彦

装丁 豪華クロス張り コンパクトサイズ

(タテ 十九・三センチ ヨコ 八・二センチ)

内容 諷誦文 十編 下炬文 二編

定価 二〇〇〇円 (送料別)

(申し込み先)

〒二四一 東京都品川区上大崎一―九―二

戒法寺内 白金ブディストクラブ

TEL 〇三(四四二)八九七一

FAX 〇三(四四二)八七〇二



第五十三卷 六月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和六十二年五月二十五日印刷 昭和六十二年六月一日発行